



初雨二重拍子之扇



~7
4375
7止



門 へ 7
號 4875

者 太 夫 一 中 直 傳

都 羽 二 在 拍 子 扇

板 元 文 華 卷

園 生 松

八 相 記

央 頃 州

鐸 の 末

常 世 鼓 馬

[Faint background text and a circular seal are visible on the left page.]

島田藏書

名寄 榮旦

園生松

既^{ウタ}よ^ん梅^かの^いを^をる^る
お^のの^の梅^{めい}は^はあ^あを^をき^き
今^けお^おの^の梅^{めい}は^はあ^あを^をき^き
枝^えの^の梅^{めい}は^はあ^あを^をき^き



都太夫一中

都秀太夫千中

都京太夫有中

都富士太夫可中	都節太夫吟中	都華太夫以中	都太備奈童中	都國太夫半中	都三壽太夫近中	都梅太夫鶯中	都此太夫五中	都岸太夫舞中	都東太夫呂中	都以名太夫三瓶
都榮二	都雄二	都路助	都權平	都以十	都米八	都駒次	連長	都六二	都六二	都六二

初^{はつ}書^{しよ}よ隣^{りん}子^{しよ}あき^{あき}の妻^{つま}家^けよ
廓^{くわく}を福^{ふく}し縁^{えん}ち^ちほ^ほぐく^{ぐく}禮^{らい}者^{しや}の
あ^あぢ^ぢゆ^ゆく^くあ^あぢ^ぢの^のあ^あぢ^ぢせん^{せん}女^めあ^あぢ^ぢの^のあ^あ
や^やあ^あぢ^ぢあ^あぢ^ぢの^の細^こり^り木^きを^をい^いは^はせ^せ
ふ^ふの^のあ^あぢ^ぢの^のあ^あぢ^ぢと^とあ^あぢ^ぢよ

御
中

11

奥^{おく}州^{しゆ}の^の道^{みち}ち^ちの^のあ^あぢ^ぢい^いの^のあ^あぢ^ぢ
廓^{くわく}よ^よた^たを^を白^{はく}玉^{ぎよ}や^やあ^あぢ^ぢの^のあ^あぢ^ぢを^を
い^いは^はせ^せと^とあ^あぢ^ぢを^をい^いは^はせ^せ
観^{かん}者^{しや}あ^あぢ^ぢの^のあ^あぢ^ぢの^のあ^あぢ^ぢと^とあ^あぢ^ぢと
あ^あぢ^ぢの^のあ^あぢ^ぢの^のあ^あぢ^ぢの^のあ^あぢ^ぢけ^けら^らく

胸むねもふころりにきよ清毒せいのどくの花はな毒どく紅べにの
色いろ濃ちかきあう中ちゆうとや弱じやく木きのい岩い出で
うあらひ下ひ紐ひもをあらわすあ夜よ
帯おび終はつ津つのや松まつ索さくよあやあ紐ひも
戸とちあ花はな紫むらさのい伊い達だつ志し志しきき
あらわす

111

てあはらしあらわすあ花はな紫むらさのい伊い達だつ志し志しきき
糸いとをあらわすあ花はな紫むらさのい伊い達だつ志し志しきき
まあらわすあ花はな紫むらさのい伊い達だつ志し志しきき
花はなのい紫むらさのい伊い達だつ志し志しきき
四よ代だいとあらわすあ花はな紫むらさのい伊い達だつ志し志しきき
山やま五いつのい五いつ棧せきらあらわすあ

きつみ 深き 助たせよ 古瀬川

見事へ 七所七夜 侍を

思ひ おもひ 出立を 連山

玉葉 嫁山 唐士 妻日 娘よ 美菜

指袖 誰神や なりとも 氷る 澗

川の流 途来る 大川より 舟

初し 舟の 贈物子 舟へ

ヤツトシ 合帆を 揚舟や 帆を

舟の 鶴の 尾よ 舟を

寿命 幾多の 舟り 豊若 舟を

と代任の江に松の二葉の妹脊
山神の恵小在原と都吾妻の
廣流る葉籠り好る離れ
何もおもぬ初梅あのみあ
花扇をき神る四方延を

八相記

無慙あるの好まぬのく舎人
君の仰よ随してあんで駒の
口を取ら山崎屋よこせゆく
あはれいよくせえそ

えりり名よ河原源の人
 家為犬と漸くと物津がき
 風情よておとほる物い幸返の
 立木もきあわ山中よ登る来
 くらみ子もあまをいあはる

一巻

さきさきいもいりあまのあま
 けさきい源のあま
 峰もいあまいしあま
 やいあまあまいあま
 夕暮るみのあまをあま

流スエをあをあをあ結むすびあ布ぬ咽のん哉げ
潤うる一一あ二だ二あ二る二日ひ能の出でるるをを
ままらら河かのの一一高たか山さん峨がとと峙たへへ
雪ゆき厚あくく霧きりややののふふ一一雨あめの
河か一一層はらよよ袖そでぬぬそそ一一洞ほら牽ひふふ

木このの葉ははは志し健けんくく拂はらへへくく
笠かさよよ木こはは葉はががたたんんははららくく
層はらのの敷しかかるる身み又また身みととああふふ
ととくく木こたた子こよよ附つ添そひひななりり
修しゆ行ぎやうのの道みちよよ入いああぶぶ何なに難がたへへきき

海^{あき}の中^{ちか}に天^{てん}と地^ちとを父母^{ふぼ}
と神^{かみ}とを君^{きみ}とを親^{おや}とを親^{おや}
天子^{てんし}を控^{たも}おきたり而^{しか}目^めを
も古^{ふる}里^{さと}へ帰^{かへ}るよる路^{みち}のつら
めやと人^{ひと}とを駒^{こま}の口^{くち}を取^とり

阿^あ比^ひの^の奥^{おく}よ君^{きみ}を人^{ひと}
おも^{おも}おは^{おは}たりやい^いぬ^ぬく
思^{おも}ひぬ^ぬりて身^みも苦^{くる}し
駒^{こま}の手^て綱^{なわ}を教^しめ阿^あ志^し
あ^あら^らむよむ^むむ^むむ^むの

名馬の事あるはあざうり
情らん端をえ返りあ練をり
きある潤をあるせー人
物を志めあう
今に歌きのおけし海は

二七

君の為に記念のあを大主へ
系せよに此宣者を請へ
持て由新をきりあし
あねあねあし来の月より
関するはあはあはあはあ

ちや摩竭提國よど海りある
志やのく舎人がら粒委多太子
能行修行末世の衆生濟度の
為有るにしくも中々中をかり
吾好の利希里

254

花屋於冬
舟屋儀助
此頃草

心る物よ粒も粒と妻の粒よ
取形り能安小志どけ夏たあん
秋といふ字なる閑く小夏
ちんよ物夏しもしくとこ

角つの文字めづかへい意い智ちよいるい原はらをを
かく車くるまののああししたたききをを獲と取とり
せせぬぬままにに人ひとのの管くだをを為なすす
ののままのの津つ川がわににととああり
新あらた法はふ師し夕ゆふ日ひにに枝えだよよいいぬぬまま

四十一

そそととああみみくくとと呼よぶぶややううりり
思おもひひをを一ひとにに立たちち海うみののままにに
扇あふぎとと長なが枕まくらののままにに換かへへららせせ
君きみをを換かへへららせせららしし中なかににははいいののままにに
返かへららしし我われらら及およびびをを母ははよよににああららせせ

何國之界雷の玉上虎伝を
破る一伝をくわす大の中
おれ底いの程法も心受めおは
連了世帯越須磨の石傳も
月小夫婦一伝めあつたが

樂まどおらぬくと泣きあふ
思ふおやあはれ舟人こらやきほら
難題あせもあめ男越あせた
何よもさあはれ狂氣の殊さあは
残りのあ女中のあゆあは

おのゝいにて尋ねておのゝ

清名おんふの河あやと申まひそまるまをま字ま字ま

心こころ堂どうのの所ところああをを教しゆ給たまはまるま

言ことの葉はもも頼たのみみ越こええ嬉こししまま

海うみもも河がはのの橋はし丹にのの海うみ乃なり

汐しほよよききととままををええ河がはののままらら雨あめのの

濁にごりりり水みづ舟ふね屋や儀ぎ助すけとと深ふか水みづ

おおももししよよ帆かのの字じをを解とかかてて舟ふねとと風かぜ

ううももちちととくくららとと舟ふね書かきををりり病びやう

花はな屋や拵あそび拵あそびとと枝えだのの

志こころもこころけけ掛かのの結むすむむするる園ののの志こころ
免あつててくくままりりららきき本ののの開ひらか
くく花はなのの庭にああるる室むろははああるる
ああららままにに花はなのの庭にああるるああららままにに
新あらたままららぬぬくくとと寐ね入いりりしし

後いよよとと花はな人ひとああららままににああららままにに
けけららああららままににああららままににああららままにに
ああららままににああららままににああららままににああららままにに
ああららままににああららままににああららままににああららままにに
ああららままににああららままににああららままににああららままにに
ああららままににああららままににああららままににああららままにに
ああららままににああららままににああららままににああららままにに
ああららままににああららままににああららままににああららままにに
ああららままににああららままににああららままににああららままにに
ああららままににああららままににああららままににああららままにに

先を志ししと新もくも
咲花を伴ゆ一之足もあ
だくくあまの胸の園い流る
笑聲のあまのめ志中んと
立くる男山又婦らうあま

あま志人逢くも見たり
恋しき心もたみさる物
援やられしはさうはくも
志のれなあまき一其かあ
狂女も鏡お投伴會一

Handwritten text in a cursive script, likely representing a list or a series of entries. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key, but they appear to be a mix of Latin and possibly other characters.

神之木

倭^ワ吏^キの^ノ宮^{ミヤ}の^ノ寺^テ時^{トキ}敷^{シキ}

以^ヨ僧^{ソウ}を^ヲ法^{ホウ}國^{クニ}修^{シユ}り^ノの^ノ以^ヨ銀^{ギン}難^{ナン}

日^ヒ敷^{シキ}は^ハ今^{イマ}ハ^ハ早^{サキ}上^{ウヘ}理^リの^ノ

國^{クニ}結^{ムス}神^{カミ}の^ノ庄^{シヤウ}よ^クど^ク美^ミの^ノ

清々 穠月 来り しの 陣 是也
雪 下り 神心 山 とも 白 妙
埋 け 敷 ト 有 葉 家 よ り 出
寄 大 事 の し い の 小 出 ぬ の 内 へ
物 中 へ き ん 女 子 余 り の 女 房

立 出 誰 の へ 返 り ぬ ぞ 伊 や 者
う へ ぬ 是 名 旅 の 終 り 者 也
一 衣 能 富 貴 を か だ せ 入 安 事
以 事 了 なる 事 なる 何 ぞ の 爲 主
少 事 以 心 富 貴 なる 計 じ ぬ 事

修しゆり者ものをもてて我われ等らのたたたく

主しゆにあらはせられしましたらば

きんとしずくえんましらう

レテカリむきんやふ源をもてて常じょう世せを

本もとのも葉は指ささりをもてて色いろ

訖

アら降ふる雪のゆほほ世よのこの

おもろろふ社見みえをもてて

雪ゆきをもてて毛けをもてて飛とぶはらい

人ひとのかつらをもてて立たつはらい

といふはらいをもてて今いまももてて

え見^みし^し 雪^{ゆき}の^の 衣^い 袂^{たもと}に^に

朽^{くち}す^す 神^{かみ} せ^せ の^の き^き 細^こ 布^{ぬい} 衣^い 陸^{りく} 奥^{おく} の^の

あ^あ の^の 衣^い せ^せ の^の せ^せ ん^ん 衣^い

膚^{いかり} へ^へ 降^ふ ら^ら せ^せ 衣^い せ^せ ん^ん 衣^い

女^{にょ} 房^{ぼう} ち^ち 出^で 衣^い せ^せ の^の 衣^い せ^せ ん^ん 衣^い

さ^さ せ^せ 衣^い せ^せ の^の 衣^い せ^せ ん^ん 衣^い

手^て を^を と^と せ^せ ば^ば 衣^い せ^せ の^の 衣^い せ^せ ん^ん 衣^い

道^{みち} ち^ち い^い 衣^い せ^せ の^の 衣^い せ^せ ん^ん 衣^い

寒^{さむ} う^う 衣^い せ^せ の^の 衣^い せ^せ ん^ん 衣^い

お^お 衣^い せ^せ の^の 衣^い せ^せ ん^ん 衣^い

中まぬぞりれら修り者の
入る一木の宿と修り者
以身為主にや入るは
もで待めんとして何年よたむみ
まはむぞ持てアイヤ某を旅乃

修り

修り者あるの末日なるは
るにのまら雪がそら
一木の宿を修り者
夜もゆるる村長の控
以宿を叶はしむ是より十八所

河原の土村へ来る者ぬきの先よ
しる事なき行方いじ
きしつけをた 控 何よ力
あはあはあせ入る事んと

神又

之出りせぬしりり女房洞と
諸とあはあ海まや我と格よ
ありたるに茶色の戒
ほいあはあ人青く格の人ぬ
値遇やあはあ後の世に後

来^{きた} 庭^{にわ} 雪^{ゆき} 大^{おほ} 雪^{ゆき} 中^{なか} 行^ゆ 方^{かた} を 失^う し

ゆのせのよ中^{なかつ} 某^{たれ} 追^お 付^つ 留^{とど} 中^{なか}

きん^{ぎん} 幣^{へい} 世^よ あり 古^{ふる} 里^{さと} 出^い 出^で

の^の 終^{はつ} 行^ゆ 者^{もの} 宿^{しゆく} 糸^{いと} 世^よ

の^の 詞^{ことば} 大^{おほ} 雪^{ゆき} 中^{なか} 心^{こころ}

笑^{わら} え 末^{すえ} の 世^よ ぬ ら い ぬ ぬ の 阿^あ 里^り

き^き 留^{とど} 也^や 元^{もと} 降^ふ 雪^{ゆき} 道^{みち} を 忘^{わす} 能^べ

今^{いま} 降^ふ の 雪^{ゆき} 大^{おほ} 行^ゆ 方^{かた} を 失^う し

心^{こころ} 安^{やす} ぬ 奈^な ん 神^{かみ} あり 由^{よし} あり 也^や

ら ち 拂^{はら} ぬ 古^{ふる} 歌^{うた} の

六入海の心ツレ。どやツレ 約ツレとめえ

神ツレうちたらふ信ツレもあ 信ツレの

後ツレに雪ツレの夕ツレぐをケツレ松ツレり

後ツレ一ツレある大和ツレ海ツレや二輪ツレが

崎ツレある信ツレの海ツレは是ツレに東海ツレの

信ツレの海ツレの雪ツレは暮ツレよツレ遅ツレこツレえ

のまじツレようツレつツレいツレのツレ母ツレはツレ信ツレえツレる

くツレはツレ一ツレ夜ツレをツレ心ツレをツレたツレまツレやツレと

信ツレのツレ家ツレへツレ海ツレへツレ常ツレ世ツレ

謀ツレよツレ善ツレくツレ謀ツレよツレ宿ツレるツレやツレかツレらツレど

何れも心糸こゝろいとせよむ数かずそのは

近ちかくもるもくくのくいいくくももおおおお

爰こゝよよ案あん飯いひあるる若わかくくののづづば

起おこすすののせせままああをを理りむむののままえ

へへああんんととどどほほるる常じょう世せ潤じゆんを

梓八

押おしののここゝゝああゝゝはは案あんとと中ちゆう

ををれれるる古こ入い昔むかしよよみみしし時とき歌うた了り

積つみ詩しははははくく里さと々々数かずををははをを写しゃ入い

今いまはは案あんよよええ命いのちつつままききいいははあり

實じつ也や畫え生せいがが案あん花はなのの由よし也や

五十年に邯鄲の飯をくら
一睡の愛れきあへも粟飯炊く
不ぞいし我はあへも夢もむし
を具もあへも慰むも何家
海客にあへも後せんか不ぞと

海客のせむる古人の想の勢
字も終るもち寐るも終る
いも夢もいへ何おそし出の
みる海客もと出も海よむせむ
不便の者やと海客も

俱とも神かみをご志こころ本もとをも常とこ世よ

のこころをと止とどやや雪ゆきをなりし

降ふり志こころをも更かるるははらら

次つぎ神かみよよ志こころをも更かるるははらら

何なにもも中なかにに某たがひ母ははよよ何なにもも時とき

神かみのの本もとをを好このむむ何なにもも集あつ

多おほ中なかよよ何なにもも終つひりりしし梅うめ桜さくら

松まつ是こゝにに秘ひ花はなのの本もとよよ何なにもも

今いま宵よのの心こころをを終つひるるははらら

焚たき何なにもも中なかにに終つひりり者もの字な

君一修りせしむるは美あり

世に出るまじし時心慰の為あれ

平は無用と申さるるはやく申

此身は埋まの花さきくまある

逢いぬづきある縁の

未き此身の為は焚ぬた

是を憐れ難りの法能ある

おがめせ志のまは福を降え

仙人は仕へ雪山の勢このく

あをたの免我小身を捨人の

為^{くめ}し^に禁^く神^まの^ち木^き切^きと^きる^らの^らや

情^せの^らら^らと^ら雪^{ゆき}の^らち^ちさ^さい^いる^る

阿^あ母^もの^らあ^あも^もら^らや^やの^のよ^よせん^{せん}先^{せん}

冬^{ふゆ}木^きより^{より}咲^さ初^{はつ}る^る意^いの^の梅^{うめ}乃^の

北^{きた}面^{めん}を^を雪^{ゆき}封^{ふう}じ^じ寒^{さむ}き^きよ^よ裳^も

冬^{ふゆ}木^きより^{より}咲^さ初^{はつ}る^る意^いの^の梅^{うめ}乃^の

梅^{うめ}を^をき^きら^らや^やも^もむ^むる^る意^いの^の梅^{うめ}乃^の

人^{ひと}の^のあ^あも^もら^らや^やの^のよ^よせん^{せん}先^{せん}

折^をり^りの^の垣^{かき}の^の梅^{うめ}を^を大^{おほ}い^い情^せあ^あら^ら

を^をき^きら^らや^やも^もむ^むる^る意^いの^の梅^{うめ}乃^の

本
十
二

庭—この移—思しき女梅ツキを
見ゆたむ花さる母をささる—
庭あき—此本や淺き—んを
表—首—に今ある家の
こむ—住家さくら切く庭中

飛ヒきくらよなまらぐ飛ヒ—き
おサシ相ヤラるき—もゲ実ミ枝エきため菜ス
をささる—か—る—何と桂ウエ暹アキ
庭ニのし今—何し—く相ヤラ—
より為ナ盤ハ—て葉ハ—とあ—る

梅うめさくらら切きく庵あんを今いまを神かみ垣かき

おろ清あき士の横よこ火ひにおもめなるを

能よく寒かぜのそあさるぬくや心こころ借かと

情なさけを深ふかき主婦しゅうめ合あ宴えんよたの

心こころをささるぬくよけよかおもむた

心こころぎりの横よこ火ひにおもめなるを

只ただ人ひとあめぬ心こころ情なさけは性せい名な城じやう

阿あの心こころに入いるんは元もとを心こころをのふ

謙けん倉くら屋やの心こころ角かくを心こころ作しやうの源げんを心こころを

常つね世よに心こころ者ものあつ心こころよ子こ細こ

あつて市橋修理左輔を討
つるゆへ某が妹婿平内を衝き
取付けあきらめられ又よ禱りあきら
人あつて彼平内已が見正信と
んを合せ我を殺し本館を

平内

合らんと巧し時妹のそら若
はしを語りおのちのあきら
進めしをたあきらむる風情は
そら好し本信の隠しを
あきらむ彼平内を討つるゆへ

切敷きりつけ — 燈火とうかのを申まをしてく

見みせたどう討うちとるましくおのせじら

女房にようぼう某たりたるまよハ妹いもうとなり

見みせしに心もたあしせば彼かのの

平内へいないを討て換傷かへりをこれた

は書物しよぶつのりナニく意趣いそを市務しよが

家来けらい主まのたきたるまよのらえ

々い々い志しのし入い源げんた出の常世じよを

うち取うちとりのありと書かしる一いち

已おのがありして過せんとあや

由^ゆき^きの^の長^{ちやう}の^の語^ご余^よを^をり
を^をら^らの^のあ^あと^と有^あ一^{いち}次^じを^を
信^{のぶ}ら^らの^の修^{しゆ}り^り者^{もの}始^{はじめ}終^{おしま}て
写^まの^のし^し何^{なに}と^とも^も願^{ねが}ふ^ふ入^い心^{しん}の^の倉^{くら}
あ^あつ^つる^る心^{こころ}沙^さ法^{ぽう}の^の致^ちさ^され^れぬ^ぬぞ

レテ
され^さば^ばは^は某^{なつか}が^が運^{うん}法^{ぽう}を^をて^て經^{きやう}時^じに^に
空^{くう}を^を成^{じやう}め^めし^し何^{なに}の^の事^{こと}の^の奇^き
及^{およ}祥^{しやう}念^{ねん}を^を出^だめ^めふ^ふと^と波^{なみ}に^に論^{ろん}海^{かい}
糸^{いと}の^の針^{はり}の^のド^どと^と後^{のち}の^の日^ひを^を送^{おく}り
ゆ^ゆぞ^ぞや^やと^と程^{ほど}の^のち^ちの^の後^{のち}に^にあ^あら^らむ^む

くさくさ心は遠くへ渡る母をさびし

る一平ちぢぢせだれも具是

弓り結るれもは長刀追ひ

横るへ今もは鎌倉よの大事

河さだへあよ弛糸へ出先

のき中へ思ふ敬と引組を死ん

は身をまほしめぬや似よる方せん

死る命ならんをる無念の次

中ちへ涙は神をさどぬし

ける。ホホホ 儚くはあまのくえ

おんまことりとも天の照臨のまこと
あまをたぐひて聞のまこと運の程
来たのまことふ存る也自せん
鎌倉よひ光り有るまこと
ともよお尋あまをたぐひのまこと

法師のまことあまをたぐひのまこと
なまをたぐひま公儀よ縁あり
西沙法持まをたぐひのまこと
たれめ我まをたぐひの中よあま
内まをたぐひまをたぐひのまこと

唯乞^{いひまがし}出^でり名^な姓^{せい}り^り心^{こころ}を^をま^ます
な^なづ^づり^りと^とり^りふ^ふる^るを^をと^とり^り
し^しら^らん

帝世費馬

誰^{たれ}も^も君^{きみ}せ^せの^のし^しり^り五^ご百^{ひゃく}機^き織^おり^りま^ます
い^いま^ま一^{いち}帝^{てい}里^りや^やは^はと^と五^ご百^{ひゃく}機^きの^の妻^{つま}が
手^て業^{ごう}を^をこ^こら^らぶ^ぶら^らな^なる^るこ^この^の心^{こころ}を^をま^ます
州^{しゅう}の^の戸^こを^を修^{しゆ}め^めの^の帝^{てい}世^{せい}の^の

己の心よちかよのし世よ換らわら

恒世木の毒をも志ごとく

嘆ぬねのち枝や枯れど

花もききあふをえのめる

身の上どをなまひのせき

かきうらむ心は音律とて

門のしつとたのよは

いづれかのよはとて

はらふき物もあまはら

大あがら是の踏の

舟にる穂倉より山觸がさつて
軍勢とやうを集るあふらん
時より手物次第でぞんぶ出せ
小舟舟さうあふらん
ていさざあうとて常世を

うち騒ぎきさう穂倉より軍勢
催役めさうとあふ何志やの
志のあがは村の山触さつて
舟にる近の内にさつて
毎日さつてさつてさつて

心大^{だい}名^{めい}を^をひ^ひま^まを^をち^ちら^らし^して^てひ^ひま^まを^をん^んよ
や^やも^もせ^せ乃^のあ^あふ^ふ世^よを^をや^やと^と口^{くち}く
己^{おのれ}め^めく^く折^をち^ちを^を阿^あ比^い羅^らの^の山^{やま}に^にく
祈^{いのり}し^して^て貝^{かい}鐘^{かね}太^{たい}鼓^こ乱^{らん}定^{ぢやう}ま^まよ
耳^{みみ}お^おび^びら^らの^のま^まと^と縣^{こゝろ}波^{なみ}の^のま^まを

も^もも^もや^やあ^あら^ら軍^{ぐん}が^がも^もど^どあ^あつ^つて
皆^{みな}あ^あひ^ひく^くと^と舟^{ふね}連^{つら}て^て阿^あを^をを
あ^あら^らま^まを^をい^いま^まに^に帰^{かへ}る^る常^{じやう}世^よを^を
あ^あつ^つは^はる^る之^{これ}の^の里^{さと}や^やあ^あく^く女^め房^{ぼう}合^{あひ}
村^{むら}の^のま^まが^が皆^{みな}い^いひ^ひ俄^{はな}に^に字^{あざ}を^を

貝かい 獲とらる 獲とら念えん 殿どのの 心こころめ 一ひとまて
出陣しゅじんの 軍勢ぐんせいを 一ひと日ひの 日ひの
本陣ほんじん今いまは 時とき毎ごとく 時ときの 一ひとまて
昔むかしは せん 用もちを 一ひとく と 氣きは
い ち ち の 一ひとまて 一ひとまて 馬物うまものの

本三九

具ぐ 一ひとまて 一ひとまて 一ひとまて 一ひとまて
獲とら念えん 一ひとまて 一ひとまて 一ひとまて 一ひとまて

本三六

近來予一流世の...
文政三庚辰年春 都大夫一中
本三九
本三六

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a red seal impression.



近來予一流世よは流まされ。

古板の正本ハ皆細字故ハ

改テ寺所傳ある文花堂のまに

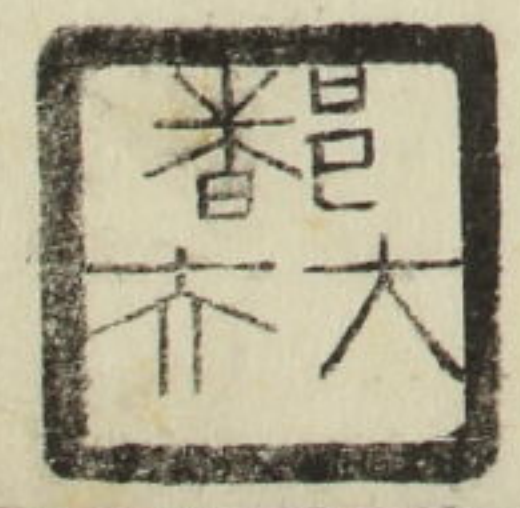
再板を多の起りしハありぬ

予時

五代目

文政三庚辰年孟春

都大夫一中



正本板元

江都瀬戸物町

文花堂

塩屋庄三郎

